

保育内容「表現」のこと～授業展開からの考察

福地 友子・篠永 洋・吉牟田 美代子

Child care study:

The development of “expression” in interaction with the surroundings

Fukuchi Tomoko, Shinonaga Hiroshi, Yoshimuta Miyoko

It should be understood that expressing oneself constitutes acting in accordance with the senses, in other words, starting by thinking and ending by acting.

Furthermore, before conscious expression lies the residue of experiences, feelings, images, thoughts etc. with which childhood is filled.

Students who study childcare should be willing, we think, in a certain sense, to go back to that period. The course of this syllabus intends and wants, we think, to educate the feelings of students so that they can express themselves using either, words, body language, pictures or any other means they can use freely.

The discoveries resulting from continuous questioning during teaching of “what are fruitful feelings” will enable us to grasp the developmental change in the students.

キーワード：感性、表現、表現の育ち、環境との相互作用

Key words : sensibility, expression, development of expression, interaction with surroundings

はじめに

1989年に「幼稚園教育要領」が改訂、1990年の「保育所保育指針」の改訂で、5つの領域に編成され、それまでの「音楽リズム」「造形・絵画製作」から「表現」へと新たな領域へ移行した。

その背景には、「旧幼稚園教育要領」の表現的活動の内容が小学校の教科と混同され、音楽や図工といった教師主導型の教科指導に陥ったことが上げられる。

また、音楽や造形を中心とした「表現の題材」の題材には、子どもの発達的な視点が欠如していたことも否めない。

このため、「新幼稚園教育要領」では、発達、子どもの心情を読む、表現を総合的にとらえる、自発性・主体性、個と集団の育ち、これらの視点を見据える内容へ改められ、保育者側の立場に立った到達度を図るのではなく、あくまでも子どもの発達の姿をとらえ、子どもの生活全体を通して総合的な指導と援助を行うという視点が重要視されることとなる。

すなわち、教師・保育者がどのように子どもを捉え、理解し、その子の発達を促すかというプロセス・視点が何よりも重きを置かれることとなり、子どもが興味・関心をもって、主体的に遊ぶ姿

を捉えることを重視した考え方を一層明確にした改善と言える。

その後、1998年に再改訂が行われ、文部省告示第174号では「楽しい集団生活の中で、一人一人の健全な心身の基礎を培う幼稚園教育を目指し、基本的な生活習慣・態度を育て、豊かな心情や思考力を養い意欲や思いやりのある子どもを育てよう」と改められた。

つまり、「表現」・「自分なりに表現する」・「豊かな感性や表現する力」の育成が加えられ、子どもの主体的な活動を通して、自ら作り表そうとする心情や意欲がさらに重んじられることとなる。

そして、2008年に新たに「幼稚園教育要領」・「保育所保育指針」共に改訂され、「新幼稚園教育要領」ではその目的として「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して豊かな感性や表現する力を養い創造性を豊かにする」と示されている。

2011年度入学生からは「保育所保育指針」の改訂に伴い、保育士養成課程の改正が行われ、その中で、「基礎技能」（音楽・造形・体育）を「保育表現技術」（音楽表現・造形表現・身体表現・言語表現）に名称を変え、専門的な技術では無く、保育表現のための技術を学ぶ科目であることが、より明確化されることとなった。

これは、「表現」を広く捉えた上で、そのねらいとして、子どもの経験や保育の環境を様々な表現活動に結び付け、遊びを豊かに展開するための必要な技術の習得が謳われている。つまり、幼児期は人間形成の基礎を培う時期として、人間としての感性を表現する意欲や楽しさを大切にすること、そして、その目標は創造性を豊かにすること、さらに、子どもの日常の生活の中で心情や意欲・態度を育てることにある。

保育者を目指す学生にとって、子どもの自発的な創造性や意欲を持って行える表現活動を支え、高めていく為に学生自身の表現力が何よりも重要であることは言うまでも無い。そして、豊かな感性と共に鋭い感受性も求められていることに他ならない。

すなわち、保育者を目指す学生は、自分自身の先入観や固定概念に捉われる事無く、自然な感情・思いを大事にしながら、子どもの表現を認め、受け止め、励まし、共感できる豊かな感性・心情を持ち得ることが肝要である。

その豊かな創造性と物事・事象を感じ取り判断する能力を育むためには、「感覚を磨く」・「感情を豊かに」・「想像力・表現力を豊かに」が三本柱として上げられる。

保育者養成校に於いて、豊かな感性・表現力を持った学生を育成するために、現在展開している授業（2年生後期）のねらい、より具体的な内容、さらにその結果として、どのような課題があるのかを検証すると共に、将来を見据えた上でどのような指導が有効であるのかを考察する。

<感性の三つの要素>

1. 感覚を磨くー感受性を鋭敏に

(1) ハンカチを使って

ねらい

外部からの刺激を受け、五感をフル活用して感じたことを言葉で表現する

内容

授業の導入部分で「感性」の重要性と「伝える」難しさを体感してもらうために「即断」しなくてはならない環境を設定し、学生全員をランダムに指名し回答してもらった。

■一枚のハンカチからイメージするもの

準備するもの

- ・ハンカチ（教員私物、ピンク色ベース、レース付き、香水を振ってある）

方法

- ・ハンカチからイメージするものをランダムに指名し、その場で即答してもらう。
- ・ハンカチは教員が手に持ち、ひらひらさせながら学生の顔の前を通過する。

結果

学生のふり返りノートから、感じたことや気づきを以下に列記する。

- ・単語だけでなく擬態語を使った表現も用いられていて、単語とは違ったイメージをわかりやすく感じる事が出来たと思った。
- ・目で見えるものにしか気づかず、五感の一つである嗅覚（匂い）に気づけなかったため、五感をフルに活用させて言葉で表現する必要があると思った。
- ・自分が感じなかった事を他の人が言っているのを聞いて、そういう感じ方もあるのかと思ったり、他の人の感じたことを共感したりすることができた。
- ・感じたことを多様な表現に変えていく楽しさを知った。
- ・表現の方法が多様にあることに気づいた。よりよい方向へ表現できるよう心がけたい。

考察

頭の中にイメージしたことを即言葉として発語し、表現する。沢山のボキャブラリーを持っていること、常日頃から多様な物事に触れていることも重要であるが、感性のアンテナを常に張り巡らし、日常的に「感じる」「言葉にする」「伝える」トレーニングが必要とされる。

保育者として子どもと対峙する時、様々なシーンで「言葉がけ」を行う。それは子どもに合わせたボキャブラリーの中から瞬時に選択し、言葉として発語されることだろう。学生たちが実習等でその難しさを如実に感じ取っている部分である。難しさというものはこれから先もついて回るものであるが、五感をフル活用することを常に意識し続ける必要があると感じ取ってもらえたと共に、これからの授業に対する取り組み方の方向付けとなった。

(2) 自然とのふれあいの中で

ねらい

- ・美しいものに触れ、自分自身の視点を持つことを意識する
- ・本物を「体感」することの重要性に気づく

内容

二回目の授業で出かけるのは水辺の森公園（R499を挟んで本学東山手キャンパスの眼下に広がる長崎港、長崎県美術館を擁する親水公園）。秋の始まりを感じさせる季節にカメラを持参した学生たちが散ってゆく。それぞれ60分程度の時間内に自分が美しいと感じたもの、風景、瞬間を切り取り、まとめたものを後日提出。まとめる方法については自由としたが、今回は造形担当の教員より「平面」ではなく「立体」の中にまとめてゆく方法について簡単に説明を行い、単なるブック形

式の写真集として提出するのではなく既成概念を打破するものの制作へと目を向けさせた。

■水辺の森公園での採集活動

準備するもの

- ・カメラ（ひとり一台）

方法

- ・水辺の森公園へ出かけ、「美しいものに触れる」というテーマに基づき、自然を五感で感じ、自分自身の「感性」と「視点」で風景や時間を切り取る作業を行う。
- ・撮影した写真を編集し、自分自身の方法でまとめたものを提出する。

結果

提出された作品の一部（写真1～6）



写真1



写真2

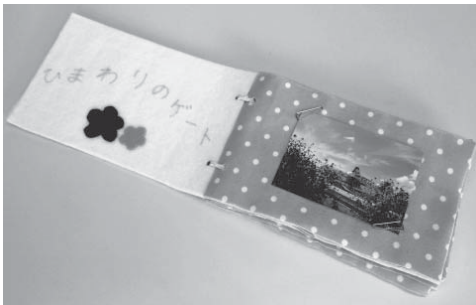


写真3



写真4



写真5



写真6

考察

「風景」や「人」「もの（構造物など）」など同じ公園内という限定された場所とは思えないほど様々な写真が提示された。また、友人同士の写真やその場で出会った人など、「時間」「瞬間」を感じさせる写真も多数含まれていた。五感をフルに動かし、何かを感じて切り取ろうという姿勢が見えてくる。提出された形態もボードにキャプションを付けたものからブック形式、帆船型の立体物まで様々な形態での提出となり、積極的にクリエイションしようとする姿勢が感じられた。

(3) 感動を語る

ねらい

- ・日常での五感のゆさぶりを感じ、あらゆる感動を動員する
- ・自分の言葉で表現し、伝える

内容

発表の場を設定することにより、普段の生活の中で「感じ」、「伝える」言葉を紡ぎ出すことを意識させ、日々のイメージを豊かに表現することを目的としてスピーチを行う。

■感動スピーチ

毎授業時あらかじめ指定された5名が全員の前に立ち、「最近感動したこと」というテーマでスピーチを行う。持ち時間は特に設定していない。

結果

学生のふり返りノートから、感じたことや気づきを以下に列記する。

○スピーチを行った人

- ・いかに人の心に届くか、身振り・手振り・表情・話すスピード・抑揚・話の組み立て方など、工夫しながら表現できるかを考えられるようになった。
- ・日々の生活の中で何気ない出来事でも表現の仕方でもみんなに伝えることができるんだと気づくことができた。一年次よりも五感を使って日常を過ごしている。
- ・話している時に、聞いている人の表情を見ると真剣に相槌をうちながら聞いてくれていた。ちゃんと伝えたい気持ちがあったら、相手もちゃんと聞こうとしてくれるんだと思った。
- ・内容を考えて臨んだが、緊張すると何を言いたいかわからなくなる自分がいた。

○スピーチをまだ行っていない人

- ・話の順番や話し方などがとても大事だと思った。また、話を聞く方もイメージして聞くことが大切だと思った。
- ・まだスピーチをしていないけど、思ったことを誰かに聞いて欲しいと思うことが増えたり、隣にいる人が、今何を思ったか知りたいと思うようになった。
- ・普段から「このことをスピーチで話したらどうだろう」と考えることが多くなり、言葉で表現してみたりすることがある。

考察

「家族」「友達」「アルバイト」「食べ物」など、毎回様々な内容のスピーチが行われている。短時間で起承転結をきれいにまとめて話す学生がいる一方、なかなかうまくまとめきれずにだらだらと話している学生も毎回いる。それについては、「事前の準備をしてはいるが、いざ人前に立つと緊

張もありなかなかうまくいかない」というアンケートの回答が多く見られた。また、言葉で相手に伝えるということの難しさを改めて感じたという回答もあった。「話す」ということについて様々な捉え方をしているようだが、「きく」という行為についてもそれぞれが再考していることから、友達に学ぶという集団の教育力が現れていることがわかる。感動スピーチという体験を通して、今まで自分の中で通り過ぎてゆくだけだったかもしれない日常の出来事を、友達との何気ない会話ではなく、人前で言葉にして伝えるための思考と実践を通して常日頃から習慣化することの重要性に気づくことができている。また、このスピーチは3年次に行われる幼稚園教育実習指導の中で「素話」へ形態を変えて継続されている。

2. 感情を豊かに

■表現遊び

ねらい

- ・情緒の安定を図るための雰囲気を作る
- ・先入観や固定概念を打破し自分の自然な感情を大事にする

内 容

一人ひとりの発想や想像力が発揮できる環境を設定し、まずは直感的な感情を基本に、第一段階として、「表現」の持つ本質的な楽しさを体感させ、感じるままを表現する。さらに自分以外の周りに対しての伝達手段・方法の必要性・重要性を学ぶことを目的とし、4～5人のグループに分け、取り組む。



写真7

準備するもの

- ・画用紙（1枚）
- ・マジック（8色）
- ・電子ピアノ
- ・4～5人のグループ

方 法

- ・電子ピアノで様々な曲想のBGMを弾く。
聞きながらイメージを膨らませ、選択した色で思い思いに描写する。（写真7）
- ・描写したものからさらにイメージを膨らませ、言葉で表現する。
（例：太陽、愛、嵐、心 など）
- ・全てのグループの描写した絵を並べ、イメージを膨らませた上で、物語をつくる。
- ・それぞれのグループで、描写した画用紙を素材にして自由に遊ぶ。
（例：紙飛行機にして飛ばす、愛の塔を作る など）

結 果

学生の振り返りノートから感じたことや気づきを以下に列記する。

- ・ いつも何か描くときは緊張ばかり感じるが、音楽を聞きながら自由に描く時間の流れはとても居心地がよく、伸び伸び描けた。
- ・ 音楽は人の心を動かし、音楽により、描こうとするものが変わっていくことを実感した。
- ・ 同じ音楽を聞いているのに、どの絵も違う雰囲気、参加した学生それぞれの感受性を持っていることが再確認できた。
- ・ 五感をフルに使い、それを思いっきり表現できた。
- ・ 表現の多様性に改めて気付かされ、表現することの楽しさを実感できた。
- ・ イメージを伝え合うことで、自分やみんなの豊かな創造性を知ることができて良かった。友達と一緒に作ることで、それに対する喜びが共感でき、いろいろな発見に繋がった。
- ・ BGMが流れる環境の中で紙とペンを使って、描いたり作ったり身体を動かしたりしながらグループで作品を作り上げていく。その過程に5領域が網羅され、情緒の安定に繋がっていくことが理解できた。

考 察

表現力はどのようにして育つのだろうか。

経験の度合い・観察力・直感力・記憶力・判断力・イメージ力・思考力・情動の変化・鋭敏な感覚・感情の発達などが絡み合って起こす心の動き、つまり「内的経験」の質と量によって人・周りに伝える手段としての「表現」が育成され、さらに、外的な要因や出会いにより豊かな表現力に繋がるものである。

今回の取り組みは、「音楽」をひとつの環境として設定し、自分の心が欲するままに直感的にイメージした世界を形として描くことがその一歩となる。

音楽を心に感じるまま描き、具体化することは、自らの内面と向き合うことから始まり、このことにより自然な表情や感情が生み出される。

そして、心も身体もリラックスした状態の中で生き生きとした描写へと展開していくのである。

この抽象から具体的イメージへの展開は、他者の表現に共感し、刺激を受けたことからイメージが形成され、多様な表現に変えていく楽しさを知ることが芽生え、さらに柔軟に開放された心身が周りへの信頼関係を築きながら、豊かな表現へと進化した。

保育者に求められるものは、子どもたちの育ちに関する援助・支援のあり方である。

保育者自身が心に内在するイメージや思いを豊かに掘り起こし、表現する喜びや満足感・達成感を抱き身に付けることが、子どもたちの創造的で個性的な表現力の育成に繋がることは言うまでもない。

将来保育者を目指す学生たちにとって、その目的意識・基礎知識を持たせた上で、「表現」を巡る体験・経験を如何に積み重ねさせていくか、これも重要な課題であり大きなテーマであることが改めて浮き彫りとなった。

3. 表現力、想像力を豊かに

■ミュージカル

ねらい

- ・総合的な表現を通して想像力や表現力、コミュニケーション力を養う。
- ・子どもの様々な表現を受け止め、助長し、創造性を豊かに育むための保育力を養う。
- ・いろいろな表現方法を学ぶ。

内 容

対象となる学生が幼児期に触れた親しみある童話などから、以下の4つの物語を題材として取り上げる。

- ・「きんのがちょう」
- ・「ヘンゼルとグレーテル」
- ・「白雪姫」
- ・「ブレーメンの音楽隊」

音楽表現・身体表現・造形表現の総合表現活動として、「ミュージカル」を設定し、4グループ・10人程度に分けて実践した。

親しみのある物語を題材に選び、まずは、言葉ひとつひとつの大切さが求められる台本の制作から取り組んだ。

続いて、音楽（歌・効果音・BGMなど）やダンス（振り付け）などを随所に入れながらのオリジナルな演出、さらに、小道具・衣装・舞台装置を製作した上で、物語を情緒豊かに、奥行きあるストーリーとして展開していく。

いずれの「ミュージカル」も、最終的な仕上げとして、招待した子どもたちを観客に発表会を実施するものである。

結 果

学生の振り返りノートから感じたことや気づきを以下に列記する。

自分のイメージを音や動きや言葉等で表現したり、集団で演じる楽しさを味わうことができたか。

- ・「ミュージカル」を学ぶことで、たくさんの音楽に触れ、表現の幅が広がり、歌をより身近に感じ好きになった。
- ・友達と一緒に歌うことは心が通じ合い、楽しく、歌詞の言葉を考えながら歌うことで表現自体が深くなった。
- ・場面にあった曲、テンポや強弱、奏法を自由に変え、音楽の楽しさを味わうことができた。
- ・1年次に演じた時の恥ずかしさ・難しさが2年次では克服され、さらに楽しさに変わった。
- ・演じることで一人一人の個性が溢れ、友達や自分への新たな発見に繋がり、演じる楽しさを存分に感じる心がけられた。
- ・個々のイメージを共有しながら、協働し、共に作り出す過程・調整は苦労もあり大変だ

が、その反面完成した時の達成感は何にも変えがたい喜びへと変化した。

- ・本番だけが大切なのではなく、プロセスでの試行錯誤・葛藤・挑戦の体験が次の経験へと繋がることを確信できた貴重な機会となった。

考察

「ミュージカル」は、本来音楽のさまざまな知識・演奏技術に支えられる部分も大きく、技術が伴わなければ、その表現の幅の広がりと共に、目的・目標に対する達成感を得ることはできない。

限られた時間でありながらも、この取り組みの成果として上げられるのは、音楽の選択においては、基礎技能（器楽・声楽）である授業の教材を用いた選曲、そして替え歌の創作などにより「歌う」という楽しさをさらに実感できたこと。また、曲想・表現の工夫としては、効果音やピアノ伴奏法（テンポ・強弱・高低・奏法）を指導することにより表現の広がりに繋がったことである。そして、身体表現・造形表現など日頃の授業で培われていた基礎技能（知識・表現）を学んだことが効果的に作用していたと評価できる。

保育者養成校では、音楽であれば鍵盤楽器や歌の表現技術を磨くという第一義的なことに留まっている場合もある。しかしこれからの養成校に求められる表現の役割は、その先の「創造的な工夫」にある。

この「創造的な工夫」は、音楽表現・身体表現・造形表現も含めた総合表現活動に問われている課題であり、そして、学生たちが「創造的」に表現し、そしてその楽しさや喜びを感じさせるためには、如何にしてその創造的な表現力を喚起・習得させ、磨くことが出来るかにある。

今回実践したミュージカルという総合表現活動を通じ、自己肯定感の獲得と共に、自分以外の表現を受け止め評価することにより、コミュニケーションの重要性を再確認し、更には、人と繋がる喜び・共感をも感じ取ることもできたのではないだろうか。

授業後毎回のようにキャンパス内で垣間見られた、歌を口ずさみながら帰る学生たちの姿は、日常生活にも溶け込んだ光景とも捉えられる。

今回のミュージカルを素材にした取り組みは、総合表現技術のレベルアップに留まらず、豊かな表現力の向上と共に、心の豊かさが求められている人間力の育成においても有効・効果的であったと結論付けることも可能であろう。



写真8



写真9

まとめと今後の課題

表現に至るまでの心の動きは人によって違い、全く同じということはない。それぞれの心の動きだからこそ、それぞれの自己表現を楽しめるともいえる。

自己表現を楽しめるような過程を大切にすることと自己表現を工夫することは、画一的な表現(活動や作品)をもとめることではないことを学ばせたい。

感覚器官もイメージも行動も自分自身のものだということを原点にすえ、心の動きそのものを大切に受けとめ認め合える保育の実現をめざして、日々の学びのアンテナを立てておくように指導を重ねてきた。

相手がいることにより表現が生まれコミュニケーションが育つ、お互いに影響し合うことでの学び、等の実感ができているということが授業の展開から見えてきた。

また、保育する上で大切な「個の充実」「集団の充実」を図るという専門性を実体験できたことになる。お互いの良さを認め合える集団として育つこと、そうした集団の力が一人ひとりの考えや行動力を高めていくことに気づいている。

保育所保育指針、幼稚園教育要領における「表現」のリード文「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い創造性を豊かにする」という観点に、素通りしないで目を向けるようになっている。

“豊かな感性とは？”を問い続ける授業の展開から“学生の育ち”を読み取る中で、学生が幼児期にどのような体験をしているかがその後の個人の基本的傾向を左右しているのではという思いも否めない。今後保育者として巣立つためには、心に内在するイメージや思いを豊かに拵げて表現する喜びや満足感・達成感を抱き、身につけることが、ひいては子どもたちの創造的で個性的な表現力の育成に繋がることはいうまでもない。

保育者を目指す学生たちにとって、目的意識、基礎知識を持たせたうえで「表現」をめぐる体験・経験をいかに蓄積させるかが重要な課題であり大きなテーマであることも浮き彫りになった。

参考文献

- ・事例で学ぶ保育内容<領域> 表現
無藤 隆監修 浜口 順子編者代表(20070107発行) 萌文書林
- ・新・保育講座 保育内容「表現」
黒川 建一編者(20040130発行) ミネルヴァ書房
- ・表現 幼児音楽①
小林 美実監修・指導 高野 雅子編著(19941025発行) 教育情報出版
- ・保育内容表現(音楽)に関する先行研究の動向
-2003年~2007年の分析を通して-
小池 美知子 越智 由紀子著(2008年発行) 松山東雲女子大学人文学科紀要
- ・身体表現~からだ・感じて・生きる~
柴真理子著 東京書籍

(2011年1月31日受理)